



事例紹介

事例紹介1 小学校での実践

事例紹介2 中学校での実践

事例紹介3 美術館での実践

事例紹介 1 小学校での実践

鑑賞を柱にした 学級経営

高松智行

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校 教諭

はじめに

私は今、図工専科ですが、2006、2007年度は5、6年生の学級担任でした。その際に、美術鑑賞を柱に学級経営をした経験があります。子どもたちは現在、中学校2年生になっていますが、まだ美術館との交流は続いております。

鑑賞を柱にした学級経営

鑑賞を柱に学級経営をしようと思いついたのは、私が特に美術館に興味があるとか鑑賞の知識に長けているとかいうことでは一切ありませんでした。目の前の子どもの実態から思いついたことです。

まず、一枚の写真ですが、私と彼らとの出会いを一番象徴するもので、5年前に撮った図工室です（資料1）。授業や休み時間に、子どもたちが後片付けせずそのまま放置していった道具や材料です。

そこでまず、私の初発の感想として子どもたちの実態はここでした。とにかく学校自体が騒然として、落ち着きがないところをどうにかしたいな、というのが5年生をもったときの最初の気持ちでした。5年生の実態として、美しいものを美しいと感じる素直な気持ちはもっているなということはありませんでした。しかし、とにかく学校自体が行事のうねりの中で1



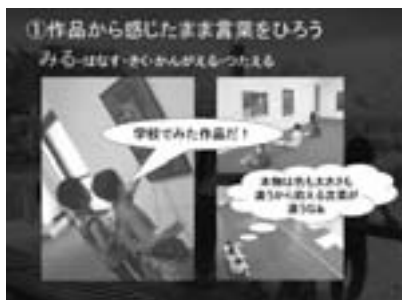
資料1
5年前の図工室

年間を過ごすものですから、授業も休み時間もずっと行事で活動が進んでいくと、その中で、やはり落ち着きがない。それから、日々自分と向き合うじっくりとした時間が確保できないというところで、そういうことが苦手な子どもが多かったように思います。そこで、鑑賞しかないと思ったわけですけれども、とにかく子どももそれから私自身も一旦立ち止まる場と、時間の保障をしたいということ、後はゆったりとした時間の中で一人になって、自分自身と対話できる時間が必要ではないか？ ということを考えました。

鑑賞を取り入れることで

それから、学級経営をする上で課題だったのは、子どもたちの中に自分と異なる意見を完全に否定してしまう子が多かったことです。発言できる児童とできない児童と完全に二極化が進んでいました。活動も声の大きい子だけが発言して、また、その子も表面的なことで言うので、その後のクラスの活動も、すべて表面的なことで終わってしまう。もちろん、自分の指導力不足もありませんが、そういったことが深刻になっていました。

ですから、求められた、絶対的に正しい答えがない鑑賞を取り入れることで、「まあそう



資料 2
美術館での活動

言われれば、そう見えるなあ」と、まず共感することを覚えてほしいなと思いました。それから、一見好みでない作品でもじっくり時間をかけて見ることや、仲間と関わることで新しい発見があるんだなということを実感してほしいなと思ったわけです。

授業での鑑賞

本校は、通学路に神奈川県立近代美術館があるのですが、最初、5年生の9割以上の子が美術館の存在に気づいていませんでした。そこで、突然、美術館に連れて行くのも恐ろしいのがあったので、まずは、週に1回鑑賞の時間というものを特設しました。プロジェクターを使ってオーソドックスに鑑賞していくわけですが、近代美術館の所蔵作品を中心に鑑賞していきました。後々、美術館に行くことを考えて、事前に親しんでおくのとそうでないのでは食いつきが違うのではないかと予想したからです。授業では感じたことはすべて正解、感じてしまったことは正解だよということで、おとなしい子にもどんどん発言を促しました。予想通り、それまであげ足をとっていた子も、「そういわれるとそう見えるな」というつぶやきがどんどん出てくるんですね。そこも大切にしな



資料 3
学校での活動

ん積んでいきました。すると2学期、今までぜんぜんこう見向きもなかった美術館の存在に気づいて、子どもたちがクラスで出かけてみたいということになりました。そうして、めでたく鎌倉の近代美術館の鑑賞をスタートしたわけです。

美術館での活動の具体

「みる、はなす、きく、かんがえる、つたえる」をキーワードに、自分自身に気づいてほしいというプログラムを組みました。なぜなら私自身、夏休みに美術館主催のワークショップに参加して初めて1日作品と向き合うという体験をし、自分自身に変容があったからです。この実感子どもたちに伝えていけばいいんだということで、2学期からプログラムを組みました。

美術館の中に入ったとたん、やはり事前にプロジェクターで鑑賞していましたでの食いつきが全然違いました(資料2)。「学校で見た作品だ」自然に作品に吸い寄せられていきました。プロジェクターで見ていたのと本物は色も大きさも厚みも全然違うから拾える言葉も違うなど。まず、美術館の中に子どもたちが入りまして、ぐるっと一周まわりながら、気になった作品の前で黙々と自分が感じたままの言葉を拾うという作業をしました。これが、「みる」で



資料4
美術館での2度目の活動

す。次に報告会をしました。その活動は、展示室を離れて（本校の場合は学校が隣りですので）、すぐに学校に戻って「はなす」「きく」という作業をしました（資料3）。例えば、こんなつぶやきがありました。「《鬼》っていう作品があったんだけど、どうしても鬼が見えなかった。」ここは大事ですね。「えっ。そんな作品あったっけ？ 気になるなあ」展示室を離れてすることで、見ているようで、見ていなかった自分に気づいた瞬間がそれぞれたくさんあるんですね。こうなったらしめたもので、もう一度自分の目で確かめに行きたいという気持ちになるわけです。再度、美術館に行きます。報告会で気になった作品を中心に言葉を拾う子どもたち（資料4）。「あっ。これが、さっき言っていた《鬼》か。不思議だねえ。鬼って赤鬼、角、牙というイメージがあるから、こんな絵になったのかなあ」「さっきは気にならなかったけど、よく見ると面白い作品だね」ということで友達の意見を照らし合わせながら、自分の見方ってものををどんどん考えて深めていきます。

最後に再び学校に戻ってお気に入りの作品についての今日の自分の見方、考えたことをみんなに伝えて終わりということになります。とてもシンプルな流れですが、最初に美術館に入った時と終わった時と、自分自身の変容に気づい



資料5
液体粘土とアクリル絵の具を使った半立体作品

て、確かな学びを実感した1日となりました。

その後も、鎌倉館、葉山館の展示が変わるたびにクラスで出かけて、基本的に同じ流れで鑑賞を続けました。

その後の活動

この美術館の活動から広がったその後の活動です。まず、教室美術館と題して、常に色や形に触れられる環境、そして美術館で鑑賞してきた作品を見られる環境づくりに努めました。

それから「水面をみつめよう」という題材（資料5）にも発展しました。近代美術館鎌倉館1階のピロティーに、池の上に張り出した天井があるのですが、ここに天気の良い日は水面の波紋の影が映るんですね。天気や風向きによって、この模様がどんどん変わっていく。「鎌倉館の究極の作品はこの天井だ」と言って、休み時間などに毎日観察に行った子たちもいました。

普段気にも留めていなかった水面が、実はあんなに美しい模様をつくるんだから、水面って本当はよく見たら、いろいろな発見ができるんじゃないかということで水面の鑑賞だけに美術館に行ったこともあります。最後に、水面というものは、浮いているものそれから沈んでいるもの、そして周りの風景が集まってできているんじゃないかという考えをみんなで共感しながら



資料 6
「ミニ近代美術館をつくらう」のひとつコマ

ら導き出し、それにのっかって表現活動をしました。子どもたちはそれまで、絵をかなり表面的に描いていたのですが、この時ばかりは一筆一筆にこだわって表現していました。

それから、秋の文化祭でも「ミニ近代美術館をつくらう」ということで、地域の方々、全校児童とギャラリートークにも挑戦しました。ここで特筆すべきことは、人と関わるのが苦手としていた子どもほど、作品を通して地域の方々と共感的に関わっていたということです。これは、子どもたちがペラダに水を張って、水面の影を来た人に見せようとした活動です（資料6）。

それから、縦割りでも1年生との交流もしました。近代美術館がつくったアートカード「宝箱」を使って鑑賞の遊びをしてからペアで出かけて話をしました。5年生にとっては1年生の素朴な見方に共感すると共に、美術館でのマナー、言語力の向上を実感した1日となりました。

無言館 窪島誠一郎氏との出会い

子どもたちは6年生になってある美術館と出会います。近代美術館で繰り返し鑑賞してきたこと、総合学習で沖縄の平和学習をしたこととの結びつきで、長野県上田市にある信濃デザイン館別館の無言館について学習をしていきたいと子どもから提案してきました。これは、最



資料 7
伊沢洋《家族》

初に出会った作品です。伊沢洋の《家族》という幸せ絵にしたような作品なのですが、実はこの画家は貧しい農家の生まれで、一度でいいから家族にこういう裕福な思いをさせてあげたかったという空想の絵なんです（資料7）。この絵を残して伊沢さんは太平洋戦争で戦死していきます。この作品との出会いにより、時代背景や作者の背景を知ることでもっと深い鑑賞ができるということ、子どもたちは実感していきました。「これはいい」ということで、無言館の作品をその後繰り返し鑑賞しました。うちの学校は修学旅行はどこへ行ってもいいというルールがあるので、実際に無言館にも行って参りました。ずっと取り組んできた無言館の学習、それから実際に無言館の前に立っている、このリアリティーは子どもたちにとってとても鑑賞の意欲を高めるものでした。ただ、今まで美術館でずっと言葉拾ってきたんですが、この時ばかりは言葉が全く拾えない子が多かったです。滞在時間が短かったということもありますが、とにかく重過ぎて言葉が拾えないとか、涙ぐんでいる子とかいろいろいて、子どもたちの中では、ここで完結するつもりが、まだまだ学習を続けたいいけないということで、2学期もまた繰り返し画学生の作品について考えを深めていきます。その年の文化祭では、「無言館」



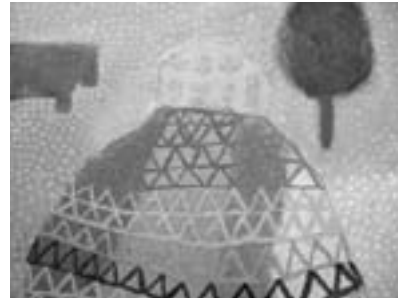
資料 8
窪島誠一郎氏による特別授業

戦没画学生の存在を地域の方に知らせようと、また美術館をつくりました。その熱意が通じて館長の窪島誠一郎さんが特別授業に来てくださいました（資料8）。

とにかく2年間、このような形で繰り返し繰り返し鑑賞の授業をして、最後の最後で子どもたちは報われた気持ちになったと思います。この2年間の繰り返しにより、子どもたちに起こった変容をいくつか紹介したいと思います。

子どもたちの変容

まず、二極化していた2年前に比べて、自分の考えをもって発言する子どもが増えました。それから、多様な価値観を認める姿勢が身についたかなと思います。本当に膨大な時間をかけていた話し合いや活動も、共感的かつスムーズに進められるようになりました。これは、一番の変容だったと思います。それから、何よりも美術館が身近な存在になりました。もうひとつは対象とじっくり向き合う児童が増えました。5年生を担任した時に図工は好きなんだけれども絵を描くことがとつても嫌いだという子がたくさんいましたが、自分の表現に対する違和感と向き合うようになった。それから自分にとってリアルな色や形、それから作文などについても自分にとってのリアルな言葉について悩むよ



資料 9
6号キャンバスにアクリル絵の具で描いた卒業制作の作品

うになった。これは、すごく大きな変容だったと思います。無言館の学習からアクリル、キャンバスに描きたいということで、時間は20コマ以上使ったんですが、もう、描いては消し描いては消しの中で、自分の中のしっくりを見つける。そういう、卒業制作をしました。（資料9）

卒業後もクラスの半数の子が、まだ美術館と連携を続けています。昨年、鎌倉館、近代美術館鎌倉の企画展に参加させてもらいました。2年間、ずっと美術館で過ごしてきた子どもたちの視点、足跡を展示の中に残したいということで、子どもたちが鎌倉館の周りで撮った自然の風景を、展示の中に取り入れてもらいました。それから、作品から拾った言葉も1冊の絵本にさせていただいて、鑑賞ツールとして来館者に無料配布されました（資料10）。子どもたち自身が美術館の楽しみ方をブログで発信する「蓮池通信」というサイトも昨年オープンしました。他のクラスの子どもたちの活動や美術館の活動も載っていますので見ていただければと思います。http://museum.group-rough.net/

それから、今年です。彼らも中学2年生になりました。今、鎌倉館で「美術館はぼくらの宝箱」という展覧会をやっています。去年の子どもたちの絵本が好評だったので受けてさらに、もっと突っ込んで子どもたちの足跡を残そうという



資料10
ポケット絵本（企画展「あの色／あの音／あの光」
ワークショップより）

ことで、学芸員の方と共に考えました。その結果、映像ということに辿り着いて、5年生の時から、何度も見てきた松本竣介の《立てる像》、斎藤義重の《鬼》という作品について、あらためて中学2年生の彼らがどう見るのか、というドキュメンタリー映像を撮りました。

3年間を振り返って

子どもたちがこの3年間、美術館での鑑賞を振り返って書いてくれた言葉です。

「絵は『見る』んじゃない、『みる』んだ。自分をみる。絵をみる。世界をみる」鑑賞とは生活の一部、鑑賞というのは絵だけではなく、日常で思っていることすべてが鑑賞ではないかなと私は思う。「鑑賞って一生続いていって終わりのない最高の遊び」生活の中に浸透している子どもたちもいます。もやもやしている子もいます。「美術館の価値、自分を知る場所。やっぱり、絵をみているようでずっと自分をみていたんだということにも気づかされます。」これは家庭環境がちょっと複雑な子で、家出して整理がつかない時には美術館に行って、深呼吸をして落ち着いて、家に戻るんだそうです。「分かりそうで分からない自分、もっと時間をかけて、何年もかけて、分かるようになった自分を見たい。もっと、活動を続けたい」



資料11
撮影風景（企画展「美術館はぼくらの宝箱」より）

まとめ

私自身も最初から確かな答えがあったわけではなく、子どもたちと一緒にスタートでした。3年経って、私が見つけた価値を3つ紹介したいと思います。

鑑賞の教育的価値 最初は全然分かりませんでしたけれども、3年たった今は「答えの出ない不確かな自身との対峙の中で、自分を起点に他人と関わりつつ意味を見出しいくという、創造的な行為」を、子どもの感覚に伝えていくことではないかなと思っています。

美術館 私にとっても、子どもたちにとっても現時点では自分本来の姿を思い出すために、「立ち止まれる場所」になっているんじゃないか。
学校と美術館の連携 私は経験から、やはり一教師と一学芸員が互いに面白いが関係性を築くことから始まるんじゃないかな、と思っています。私がこういうことをしたいと言った時、美術館の学芸員が「あ、それいいですね。面白いですね。やってみましょう」と言ってくれる。また、美術館の学芸員が新しい提案をしてくれた時に、私も「面白い。やってみましょう」と言う。そういうことの繰り返しでした。

詳しくは『子ども×神奈川県立近代美術館（当日配布資料）』という冊子に書いてありますので読んでください。

事例紹介 2 中学校での実践

普通の中学生を 作品と出会わせるために

濱脇みどり

西東京市立田無第一中学校 教諭

はじめに

「普通の授業の中でどんなことができるかな？」というテーマで2つの事例を紹介します。

私も実は条件が揃わないとなかなかこういう実践はできません。しかも、状況はここ3年で一層きつくなってきたように思います。実際には、まず同僚の先生を説得するところから始めないといけないと思うのですが、「本物に出会える」「その空間が子どもたちを変える」「深く味わって見方が広がる」と同時に、それを通してどんなことが子どもたちに返っていくのかということが、どの程度深く考えられているかによって実践が進んでいくように思います。

中学生について

最近の中学生、KYという言葉が本当に流行りました。子ども自身が「空気読めよ」というオーラを出していることが非常に多くて、自分たちがいるその場の雰囲気を何よりも大切にします。要は、自分の居場所づくりに窮々としているのです。そのような中学生が、自分とあまり関係ない人と会話をするというのは、なかなか難しい。以前、東京国立近代美術館（以下、東近美）の一條さんと「中学生は口は動かないけれど、頭や心は結構動いている。だから、そんなに怖ろしがらなくてもいいのかも」という会



資料1
手書きプリント（事前学習）

話をしたことがあります。また、「美しい」「質が高い」「これはすごいぞ」というものには憧れの気持ちももっている。ただ、互いの領域を侵さないように棲み分けをしている。それから、「自分に関係ないや」と思ったとたんに退けてしまう傾向が強いとも感じています。

活動のねらいを定める

美術館に連れて行っても一瞥して次々行ってしまって、深く心に残るところまでどうやってもっていったらいいのか？説明をただ聞かせればいいのか？このあたりが悩むところだと思います。私の場合は、3つの「つながり」というねらいをもちました。

①人とのつながり

「○○ちゃんはこういう風に思ってるのか」というような人の存在に気づく、仲良しグループじゃない人とのつながりを実感してもらおう。

②日常とのつながり

中学2年生としての生活と作品とのつながり。同じ生きていく中で、作者がいろいろなことを感じて作品ができていくということに、中学生なりに感じてもらいたいという思いです。

③造形活動とのつながり

今見ている活動と、自分の表現とがつながっていくものだととらえられると、すべての活動に自信が出てくるのではないかと思います。



資料2
ワークシートへの記入（事前学習）

実践1：立ち寄り型鑑賞（東近美との連携）

前任校の豊島区立千登世橋中学校で行った、立ち寄り型鑑賞という4年前の実践です。仲良し2人でユニットを組ませました。複数で活動することによって、見方が広がって深く考えられるようになるのではないかといいねらいです。それから、事前に選定した作品の前にボランティアガイドさんに立っていただき、必ず話をしてもらうという1つのミッションを設けました。自分たちから行って挨拶し、「この絵はこんな風に思ったんですけど、どうですか」というような話をしてくれるというものです。

時数確保については、この時の総合のテーマが「共に生きる」だったので、歴史的な人間と同じように自分も生きていることに気づくというのと、交通機関を使う、人と挨拶する、その辺りを加味して6時間扱いで実施しました。

まず事前学習、2日後に本番、そして事後学習という流れになっています。

①事前学習（2時間）

体育館で実物投影機に手書きのプリント（資料1）などを映して、話しながら子どもたちに理解を深めてもらいました。

「普通の授業のときは『見る』、『感じる』、『つくる』を試行錯誤しながらぐるぐる回っているよね。今回はつくらなくても同じように『見る』、



資料3
岸田劉生の作品の前でのトーク

『考える』、『語り合う』をぐるぐる回って、互いにそれでどう思ったか？『気がつかなかった』とか『こんな見方もあるのか』ということをつくさん体験してもらえるといいなと思います」

それから、近代ってどんな時代だろう？というところで、ちょうどこの年にやっていた映画『ALWAYS 三丁目の夕日』や、祖父母の生まれた時代などを話題に、年表の大正や明治に印をつけながら、何となくこういう時代だったのかな、という感じをつかんでもらいました。

作品の選定については、前もって11作品を美術館との話し合いから選定し、カラーコピーを用意しました。イスに作品のコピーを置いて生徒が巡っていくイメージだったんですが、こうやってすっかり寝転んでしまい、同じ作品について語りながらワークシートに書いていくという活動になりました（資料2）。

②当日（3時間）

これは岸田劉生の絵をみんなで見ているところ（資料3）ですが、2人組だったのが、だんだん人だかりができて、気がついたら8人とか10人とかになっていました。この男の子たちは、結局30分以上ずっと、あーでもないこうでもないといって、「この影はなんなんだろう」とか話をしていて面白かったです。

座りこんで2人の世界でじっくり見たり、違



資料4
実物投影機を使った発表（事後学習）

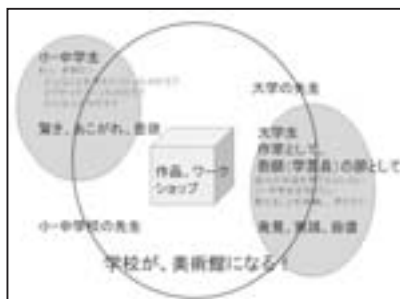
うところに行ってまた戻って来たりと、自由度がすごかったです。浅原清隆の《多感な地上》という作品も、不思議がいっぱいあるということでかなり会話が進んでいました。すると、一般の方が会話に入っていっちゃって、年配の方だったのですが、「白いハイヒールは花嫁さんしか履けなかったんだよ」という話をしてくださったりして、その制作年代のようすについて話が進んだのを覚えています。

③事後学習（1時間）

クラスごとに行いました。同じ作品を選んだ生徒で集まって話し合い、それをまとめてから、1つ1つの作品について代表者が発表するという形をとりました。これは、実物投影機に作品のカラーコピーをおいて、最初はこう思っていたんだけど、実際に見たらこうだったという話をしてくれているところです（資料4）。ちなみに、この《戒厳状態》は、初めの印象と全然違って、という反応が一番顕著な作品でした。

実践2：旅するムサビ

東大和市立第二中学校でも間もなく開催（2009.8.8-8.9）されますが、これからご紹介するのは、半年ほど前の2009年2月12日～27日に、羽村市立羽村第三中学校、私の勤める西東京市立田無第一中学校、そして、府中市立若



資料5
「旅するムサビ」基本構想

松小学校で行ったプロジェクトです。武蔵野美術大学(三澤先生)の学生のみなさんと話し合い、作品と作家が旅をする「旅するムサビ」というプロジェクトにしようということで、進んでいったものです。実は、今とても反省しています。私の中に「お任せしちゃえばいいか」みたいなスタンスがちよっとあったんですね。どんなことを自分は見せたいと思うかということまで、とことんやらなくてはいけなかった。大学生のみなさんは非常に意欲的で、どんな子たちなんだろうとか、どういう風に自分の作品を見てもらえるだろうとか、とても真摯に取り組んでくれていたと思います。

美術大学の学生さんは、教師の卵であるのと同時に作家の卵でもあり、それから学芸員の卵でもあるという、そういう稀有な状態ですよ。子どもたちも、作品だけが来るのと違って、作家と一緒に来てくれ、しかも歳も近いということで、美術の鑑賞ということ以上にいろいろな成果があったと思います。

1クラスを3グループに分け、1グループ12、3人の生徒にトーカーとして1人の大学生についてもらいました。そして、一緒に掛け合いのようなかたちでトークをする。それと同時に、タイムキーパーや連絡係、記録をとるスタッフもということで、かなり多くの学生さんが来



資料6
作品の前でのトーク（新聞紙による兜の作品）

てくださって活動しました。

一気に飛びますが、うちの学校の吹き抜けの場所を使って展示をしました。ギャラリーのようなつくりの学校ですが、実際には学校の中に生徒の作品がありません。ちょっとやんちゃな子が多くて出しておけないという、その中での展示です。これは新聞紙でつくった兜が紐でつながっている兜タワーの作品です。右側の椅子の上に新聞紙が置いてあって、「あなたもこのプロジェクトに参加してください」という作家の学生さんのメッセージが書いてあって、つくった人の名前を書くスケッチブックも置いてある、という風な参加型の作品だったんですね。設置作業が終わって展覧会初日に学校に行きましたら、非常に冷たい視線が職員室にあって、「あの兜、たぶん1時間もたないんじゃないか」という視線です。結果としては大丈夫だったのですが、やはり、人が一生懸命つくったものを出しておかなければ、それに対して優しい気持ちになれませんので、どんどん出していかなければいけないのではないかと新たに思った次第です。

さて、実際のトークですが、まず挨拶をして始めました。2人大学生がいるのですが(資料6)、左が作家で、右がトーカーの方ですね。このトーカーの方の誘導というか関わり具合がとてもよくて、いつの間にか話に聞き入っているような



資料7
作品の前でのトーク（絵本の作品）

いい感じでした。

これは手の中に入るような小さな絵本ですが、だんだん広がっていきます。「ゴキブリ」という絵本なのですが、子どもが食べこぼしをするとゴキブリがビローンと出てきて、最後にすごくたくさんゴキブリがうごめいているというところで盛り上がっています(資料7)。

日本画の作品もあります。この作家は学校で1週間公開制作をしました(資料8)。それは1校目の羽村三中から続いていたんですが、羽村三中では本当に真っ白のパネルの状態から始めて、2校目のうちではこれくらいできていく状態です。毎日毎日少しずつ絵ができていく状態を、子どもたちは見ることができました。

今回は3年生の授業で1日に通して4時間やったので、昼の時間に1度ちょっと打合せをして、仕切り直しをしました(資料9)。

美術館訪問における事前の話し合いの重要性

2つの実践を合わせて、大事にしないといけないこととして挙げられるのは、事前の話し合いですね。これが本当に大事だと思います。先ほどの発表でも先生と美術館の方が「面白いね」「やりましょう」となったお話がありましたが、まさにそうだと思います。どんな子たちで、どんな感じのことだったらのってくれるのか、と



資料 8
日本画の公開制作

か、どういう状態ならできるかな、ここまでは無理かなとか、いろいろあると思いますが、そういうような話し合いですね。東近美の実践の時にお休みの美術館にお邪魔して、一條さんと2人で作品を選定することができました。「この作品はぴったりかもしれない」とか、「ちょっとこの作品を入れると偏ってしまうかな」とか。「こういう子だからよろしく」とお任せしてしまうんじゃないなくて、1つ1つの作品を自分で選ぶことが大事だと思います。それから、学校や保護者に向けた事前の説明（どんな美術館に行くのかとか、どんな活動をするのか）は、当然のことですがしっかりやっておかなければならないだろうということ。そうしないと距離が遠ざかってしまうと思います。

事前学習について

事前に子どもたちに作品を1回見せておくっていうのも、よし悪しがあるかもしれませんが、大事だと思います。ガイドさんの反省会での振り返りをテーブル起こししていただいたものがあるのですが、読み返してみても、事前にある程度のことを知って子どもたちが来てくれているので、会話がスムーズに始まったという話がたくさんありました。事前にある程度情報をもっての方がいいのかなと思います。



資料 9
昼休みの打合せ

事後学習について

それぞれバラバラに作品をみているので、「あなたはどんな風にみたの?」「ああ見た見た」というだけでもすごくいいのですけれども、鑑賞活動が自分にとってどうなのかということまで、中学校の段階ではしっかり言葉に落としおくことが大事なのではないかと思います。自分にとってどんな財産になったのかという風に考えておかないと、その活動はするって過ぎてしまうのかなと思います。

ギャラリートークに適した人数について

立ち寄り式の場合は、2人組になってもいいました。仲良いグループなのでバラバラになる心配はないだろうということと、1人だと寂しいものだから団子のように集まって大集団になるかもしれないということが理由でした。2人組みだと安心できるので、気楽に自分の言葉が出せたり、自由に動けたりということもありました。先ほどもありましたが、1回ちょっと見えて、違うところに行って、「気になるから、もう1回見ようよ」と言って、もう1回戻ることができたということですね。それもすごく主体的に活動できたということ。それから、生徒80名に対してガイドスタッフが15人と、たくさんの方たちが、肯定的に子どもたちの言葉を受



資料 10
旅するムサビより

け止めてくださって、そういう体験はなかなかないですよね。「えーあれ男じゃん」とか「女じゃん」というような、どうってことない会話ですが、そんな言葉を「そうだよね。どうして、そんな風に思ったの?」と受け止めてもらうことはすごく大事なことだと思います。

学生のトーカーについて

「旅ムサ」では、学生2人組によるトークでした。トーカーの方たち自身が、1人だと沈黙が怖いとか、自分がガアーツとしゃべってしまうのではないかと心配があったと思うのですが、2人だとちょっと客観的になれるのかもしれない。また、子どもにとっては、3、4歳年上の学生の先輩というのがとてもよかったです。これは予期していなかったんですが、中3の試験目の時期だったので、学生の方が自分で勝ち取った進路について自信をもって話をしてくれたんですね。それから、自分のやっていることがすごく好きだという自己肯定的な気持ち、オーラが出ていて、その姿を見ることができて、すごくよかったなと思います。

対話による鑑賞について

12人程度のグループというのは、もしかすると人数的に多くて、6人くらいで動く方が話は



資料 11
立ち寄り型鑑賞より

しやすいのかもしれませんが。今回は、展示場所の関係で、あまり多くのグループがぐるぐる回ると、互いに干渉してしまったり、声が混じってしまったりする心配があったのと、スタッフの問題で、3グループで各12人くらいだったら、ちょうどよかった訳です。

対話による鑑賞では、子どもたち自身が自分のことに気がついたり、自分の外側にあるいろいろなものにも気がついたり、自分の隣にいる人に温かい気持ちになれたり、と思いがけないよいことがたくさんあって、今後につながっていくのかなと思っています。中学2年生の振り返りの言葉の中に、「世界を知り、歴史を知り、作者の生き様を知る」というのがありました。

さいごに

実際にやるかどうかは、自分がこの作品を見せたいと思えるかどうか、もしくはこの活動をしている人と子どもたちを会わせたいとどこまで思えるかだと思います。それがないと時数のやりくりとかも疲れてて無理、という感じになりますよね。毎年やりたいと思ってもなかなかできないのは、その辺のことが大きいのかなと思います。そういう作品や人に自分自身がまず出会いたいなと思いますし、そういった機会を大事にしていけたらいいなと思っています。

事例紹介 3 美術館での実践

鑑賞の基本の力を 拓きたい

—学芸員にできること、教師にできること—

竹内利夫

徳島県立近代美術館 専門学芸員

はじめに一手の携え方

本館は、学校と連携するにあたって、窓口に教育担当というのを置いています。でも、できるだけ他の学芸員も協力して、出前授業に行ったりしています。その理由はひとつです。1人の人が頑張る体制でいくと必ず先細りになってしまい、結局この活動が続かないという、リーダーの森の長期的な考えがあつてのことです。

今日お話す実践は「楽しさを体験する」というのがメインになるかと思います。初めて独立した鑑賞の授業を受ける、子どもたちや先生との取り組みです。主体的な鑑賞は、独りぼっちでできることではなくて交流の中で実現する、という考えでおります。

「本物に出会う場所で、専門的な話をどうぞ」などと先生方から振られることが多いのですが、この5年間やってきた私の実感としては、うんちくを語るというよりも、見えたものと関わり方を、初めて鑑賞する子どもたちに提案するのが役目ではないかなと感じています。

徳島県立近代美術館について

徳島は四国の右側、大阪と和歌山に向かっていて、美術館は徳島市の郊外にあります。作品収集には3つの方針があつて、①20世紀の人間像、②徳島ゆかりの美術、③現代版画、とな



資料1
移動展の様子

ります。1990年に開館した後発の美術館で、しかも徳島で初めての美術館です。どうやって親しんでいただくか、その手立てとして「人間像」というのをキーワードとしました。

移動展

美術館へ来ていただくのが難しい郡部へ作品を持って行く活動です。写真(資料1)の右の方に映っている絵は、菊池契月(けいげつ)の《虫撰(むしえらみ)》という静かな作品です(資料2)。この地域は美術愛好家が多くて、「家にもおじいちゃんの掛け軸があるよ」といった話題がよく出るという事前の情報がありました。そこで、この地味な作品をちょっとアイドルにしたいなと思って、ポスターに取り上げてみたのです。この年、私は久しぶりに教育担当になって張り切っておりまして、最初にどんなガイダンスをしたらよいか、そこから逆算してこの作品を使おうと決めていました。保育園から高校生まで、すべて同じひとつのクイズ「虫はどこにいますか？」からガイダンスを始めました。「虫かごの中にいる」というのがクイズの答えですけれども、低学年だったらどんな反応をするかお分かりだと思います。「嘘つきー」と大ブーイングになるのですが、「でもいるかもしれないよ。この女の人はどんなようすかな」と問いかけると、「大事そうに持っ



資料2
菊池契月《虫撰》1930年頃

ているから、やっぱり中に大事なものが入っているかもしれない」「どうして大事そうだと思う」「だって手が優しそうに持っている」などと低学年もしっかり見ます。小さい子たちには「何が描かれているか？」ということよりも、むしろ生活体験、実際に知っていることに結び付けていきます。そして、中学年になれば想像や印象、さらに年齢が上がれば、技法といった点からも関心をもつように、その虫のクイズから進めていきました。先生方にとっては、日常茶飯のことと思いますが、学芸員の立場では、すごく勉強になりました。

チーム・ティーチング—私の居場所

もう一枚写真（資料3）を紹介します。この右で後手を組んでいらっしゃる先生、この写真を見て何かお気づきになることがありますか？

この先生、私を見ていないですよ。絵も見えていない。子どもを見ているんです。自信満々の笑顔で誰がどんな活動をしているかずっと見取っていらっしゃるんですよ。私の話を翻訳しない。「〇〇さん、こないだ読んだ本にあったな、こんな話」そう言われた子どもはわかるわけです。毎日同じ場所で勉強しているわけですから、そうすると作品との距離のとり方みたいなのがまた変わります。そうしたら、周りにいた子も、



資料3
移動展でのチーム・ティーチング

また立ち位置が変わったりする。「ああ、T・Tってこうやるんや」って私はこの先生から教わったんです。私に任せるのではなく、分担させようとしてくださっている、自分に居場所がある、とすごく思いました。要是教室のペースで、教室のフレーミングでやってほしい、今日の話はそこに尽きます。

鑑賞シート

鑑賞シートといってもA4で4頁、薄いものですが、大学の先生、小・中・高の先生、総合教育センターの先生とチームで開発しています（資料4）。今までに8種類つくりました。これはセルフガイドではなく、授業で使うためのものです。しかし、学校にサンプルを送ってもなかなか反応がないんですね。そこで授業研究会を開き、実際にシートを使って授業をしてくれそうな先生に声をかけて、実践結果を持ち寄っていただいています。私たちにとってはフィードバックとしてとても勉強になります。

小学校との連携—鑑賞遊び

「鑑賞遊び」と呼んでいますけれども、これは絵の中から聞こえてきた音を見つけて、聞こえた音の正体を言葉にしていこう「音のかくれんぼ」という実践です（資料5）。小学校の授業は



資料4
鑑賞シート

必ず対話型ですよ。でも、一斉の活動の中では、どうしても傍観者になる子が出てきます。ルールをすぐ真似たり、変えたりして、みんなで遊べるような場、それはモデル学習だという考えが、実践された濱口由美先生（鳴門市立板東小学校）にはあったんですね。

これは吹田文明さんの《雨のあと》という作品（資料5の中央）ですが、「リリリン」という音を、小学校2年生同士だとちゃんと当てるんですね。静かな構図の虹を動かして音を見つけています。しかし、音によって表現することが活動の目標ではありません。必ず形と色に戻っていくように気をつけています。濱口先生の授業案を、同じやり方で自分なりに何回もやってみました。授業を先生と共有することができたという思いを、ここで取り上げました。

これはカルタを使った「シーがる・た」という活動です（資料6）。彫刻はいろいろな方向から見るといいですよ。鑑賞シートの上でもそのことに触れてもらえるよう、シーガルの作品をいろいろな角度から見た写真とその写真から子どもたちがよんだ絵札をマッチングさせていくカルタ遊びの形にしました。これを応用した展示室での「作品カルタ」の実践も増えています。最初にルールを示し、練習問題を出します。意見が分かれても、どちらにも必ず理があります。



資料5
鑑賞遊び一音のかくれんぼ

そのことをみんなで確認するわけです。このような簡単なルールは、子どもたちはすぐ覚えてしまいます。学年の低い子も、ささっと自分の作品を選んで書きはじめます。何をすればいいかというモデルがその子の中にあれば、もう自信満々に歩いていきます。このカルタの何が面白いかというと、作品を一言で言い当てるのって、かなり難しいですよ。それを一旦、一つの世界として自分なりにつかまないとカルタに書けないんですね。だからとても単純な活動ですけれども、自分の見る力を総動員して、作家がつくった世界を丸ごと受け止めるという要素が、私はあると思っています。そういう子どもたちの活動を見るにつけ、ここには見ることの原点があるなと思います。

中学校との連携

中学校との連携というのは数は非常に少ないですが、先ほどの《虫撰》の活動の1年後です。移動展「バクバクパーク」を考え、目のつけどころや見るヒントを紹介しやすいような作品を選びました。担任の中本亜希子先生（那賀町立相生中学校）の「本当にこの子たちは見ることは好きですから大丈夫です」という一言があって、私は絵本の読み聞かせから入るとことができます。丸坊主で私より背が高い強面の中学生



資料 6
鑑賞遊び—シーがる・た

を相手に、日本画の作品から私がつくったお話を
 を読んでいるんですね(資料7)。思春期の子ど
 もたちがにやにやしながら聞いています。だけ
 ど作品は目を皿のようにして一生懸命見てくれ
 ました。こういう子たちがべたんと座って5分、
 10分と没頭している姿が私は大好きです。

次の年は「伊原宇三郎とピカソ」という展示
 会を別の場所で、鳥澤和佳先生(海陽町立海南
 中学校)という方と行いました。鳥澤先生は学
 年ごとに、友達の描いたものへの評価に「パクリ」
 という言葉が多い、資料集の裸に反応して騒ぐ
 幼さもある、といったことをたくさん書いて送っ
 てくださるんです。私に通じるかどうかかわら
 ないのに。

次頁の写真(資料8)で私がしているのは、
 恥ずかしいのですが、自分が受験時代に書いた
 鉛筆デッサンを見せているところです。裸を描
 く時は私も恥ずかしかったけれど、絵がうまく
 なりたと思ったら恥ずかしさも飛んでいった
 みたいなお話を、これはおっちゃんの話やけど
 なって話すわけです。その後、伊原の模写作品
 を見てもらうのですが、彼らに言わせればパク
 リのものです。

この伊原という人は東京芸大を主席で卒業し
 て、5年間ほどパリで頑張ってルーブルで一生
 懸命模写をしたりします。でも結局戻ってきて



資料 7
中学生の鑑賞のようす

あんな長大な西洋の歴史に追いつくのは無理や
 できへんっていうのがその人の結論だったんで
 すね。大の大人の優等生がバリから帰ってきて、
 「無理や」の一言って、これ君らどう思う? と
 いう話をするわけです。この地味な作品を子ども
 たちは一生懸命見ていました。私がそんな話題を
 落語みたいな話をしたからといって子どもが変わ
 るとか、子どもに何かが入ったとかいう気はもち
 ろんありません。けれどもそういう話題は、この
 子たちには必要だという情報を何となく先生はほ
 のめかしてくださっているわけです。そうすると
 私はそこに立つ位置が何となくわかる、というこ
 ちがお伝えしたいことなんです。

職場体験

数少ない高校生、中学生との出会いの一つと
 して職場体験があります。これが、非常に面白い
 のです。美術に興味があって来てくれます
 ので、集中してやってくれるんですが、私の授
 業の練習にしっかり点数もつけてくれます。「先
 生の話し方は面白かったけれども、目標はもう
 一つ」という具合に減点されたりするんですね。
 授業を受ける役をして、先生の授業評価をする
 ところまでが今日の職場体験です、という風
 にお願いをするんです。「小学校みたいだと思っ
 たけれども、やってみたら全然そうじゃなかった」



資料 8
「伊原宇三郎とピカソ」より

「自分なりに感じる点を言えるというのはよかった」「音を探すことで作者の気持ちまで読み取ろうとしていた」と自分を振り返ってくれています。学習を自分で批評する力が、この子らあるんやな、と気づけたことが私としてはとても面白いことでした。

多面的分担

鳥澤先生がおっしゃるのは多面的にやらなければ駄目だということ。見るだけでは駄目で、技法体験もやってみる、自分の制作もやってみる、いろいろな方向から攻めていく。写真(資料9)は、展覧会を見る前にマッピングやデカルコマニーの実技をさせ、それをまたここヘイゼルと一緒に持ち込んで来られるんですね。そして、あんたらがこないだやった活動これやったな、という話を見学の間にはさまれるんです。その中に私は所在なげに立っていますけれども、そのうち場所を与えられて話をするわけです。教師と学芸員というのは、何らかの意思疎通をした方がいいと思うのですが、「学芸員さん、専門のお話をどうぞ」と言われるけれども、専門の話をするだけでは、当たるも八卦、当たらぬも八卦みたいなことになってしまうと思うんですね。やはり、学芸員の側も鑑賞学習の基本というところで、何か役割を分担していたい、役



資料 9
中学校との連携より

に立ちたい、という思いで関わっていくというところが、私としては連携の大切なところかなと思っています。

こども鑑賞クラブ

最後に、もう一つご紹介して終わりにしたいと思います。土曜日の美術館を楽しむ「こども鑑賞クラブ」という小学生向けの催しです。これも今年で6年目に入りました。手づくりの探偵手帳とかワッペンとかを使って、予算ゼロで行っています。写真は、私の着ている古着にクレヨンで描いているところです(資料10)。実際にこの後、現代美術家が自分の服に色を塗った作品を鑑賞するのですが、家でしたらきっと怒られるようなことを、土曜日のこの遊びの時間はやろうかと。学校との連携の仕事のもう一面を探求したいということで森が発案したのですが、「いいですね」と言ったら「竹内さんあなたがして下さいよ」と言われるんですね。優れた教育者です。そして、苦しみが始まりました。

学校対応っていうのは場数を踏めば踏むほどそれなりに思うことがあったのですが、これは授業であってはならないわけです。もちろん力を発揮できた喜び、自己実現の喜びをベースに置くところは学校も鑑賞クラブも同じだと考えますが、子どもたちにとって今日の指導目標は



資料 10
子ども鑑賞クラブより

これやからなみたいなのをいわれても、それでは土曜日の遊びにはなりません。ではどういう楽しみ方があるんだろう、と考え出すと考えても考えても難しいことになってしまいました。全部の展覧会で、毎回1回ずつするのですが、そのたびに手づくりで企画をします。子どもだったらどう楽しむか、といった目線でいざ見てみると、わからなくなってきます。いつもはでき上がっているコンテキストを落としていくという発想で見てるので、お客さまにはこう見ていただきたい、という情報の流し方には慣れているのですが、いざ、見てみるとわからないところはいっぱいあるんですね。そこから出発するのが一番早い、というのが今、6年目に入ってもっている実感です。キャッチーなものだけ追っていても、心から楽しめないところがあります。子どもたちに、近寄り難いものもよく見てみなさい、自分は気づいてなくても他の人にはいろいろな見方があるよ、そう指導するわけじゃないですか。でも、当の自分が苦勞するところを見て見ぬ振りしていたら、それちょっと違いますよね。指導する立場として、どういうところで困るかという実感の話をしたいと思いました。難しいことほど寄り添うという視線でやってみたいということです。「寄り添う」「共感」というと、柔軟で何でも同化していくようなイ



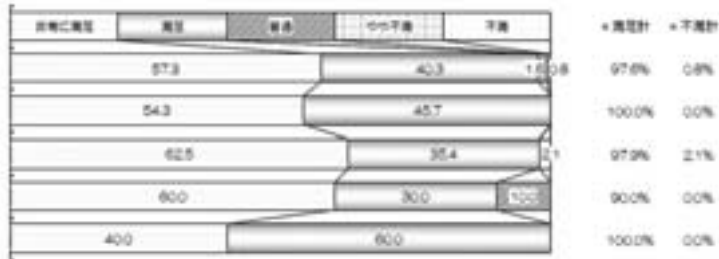
資料 11
子ども鑑賞クラブ「日本近代洋画への道」より

メージがあって、私としては使いにくい言葉だったのですが、最近は大違イメージでとらえています。そこには疑念や葛藤も必ずあるはずやろうと。そういうものを含みこんだまま向き合っていくというのが共感的にみる、ということなのではないかと考えています。

さいごに

手の携え方という風に話して参りましたが、これはあくまで徳島の事例です。鑑賞シートを開発していることも影響していると思うのですが、すぐく教室本位できているなと我ながら客観的に振り返ってみて思います。もちろん美術館としての専門性、必要な時は情報を提供したり、その調べ方の指南をしたり、ということももちろんあるのですが、もう一つは鑑賞学習というのは積み上げですから、基礎の部分がないといきなり深い鑑賞っていうのは絶対無理な話ですよ。どの学年であっても、経験がないなら基本となる体験からまずやっていった方がいいんじゃないかと思っています。美術館がアートに出会わせてあげるとか、教師にできない知識を入れてあげるとか、そういう立場も認めますけれども、私のリアリティとは違うという感じで、今考えています。

受講者アンケート（事例紹介）



受講者感想（抜粋）

小学校教諭

連携のあり方考えさせられた

小、中、美術館それぞれの実践を知ることができよかった。特に、連携のあり方を考えさせられた点は、大きな収穫だった。

どんどん連携をとりたい

徳島県立近代美術館の話が自分にとって新鮮で新しい方向づけをさせてくれ、学校と美術館の連携がどうあればよいか多くの示唆を与えてくれた。美術館とどんどん連携をとりたいと元気づけられた。

3つの事例とも心動かされた

2学期からの学級経営に生かしたり、ペア鑑賞を進化させたり、徳島県に行ってみたくなったり…3つの事例とも心を動かされた。

よく工夫されている

特に中学校の先生の実践が、現場や子どもたちの課題を明確にとらえて、それらに応じてよく工夫されていると感じた。共感したところが多く、私自身のこれからの実践のヒントとしていきたい。

使わないのはもったいない

美術館を、児童の教育に使わないのは、本当にもったいない！と思った。これからの自分の教育活動が広がるなあとわくわくしています。

子どもが自分自身と向き合う姿

「子ども×神奈川県立近代美術館」の発表が素晴らしかった。きちんと計画を立て、突きつめて活動することにより、ここまで子どもが成長するのだなと驚いた。子どもたちが作品を通して、自分自身と向き合う姿が感動的だった。

中学校教諭

大変役に立つ内容

先進的なことも、自分の学校に近いことも含まれており、大変役に立つ内容だった。これから鑑賞について取り組んでいく順も頭の中にできかけてきたように思う。

実際に行動しなくては

小、中、美術館のそれぞれの事例を詳しく知ることができた。やってみたい事例もあり、まずは、実際に行動しなくては、と思った。

実践しやすい発表

「立ち寄り型」鑑賞は新しい発想で、現実的な方法だと思う。実践しやすい発表をしていただき感謝。

正解のない鑑賞

学級経営に鑑賞を取り入れていることに驚いた。気持ちや考えを共有し、他者の考えを認め合う場を設定し、正解のない鑑賞にそれを求めたことが素晴らしいと思った。

学芸員

自館化していきたい

それぞれの事例が次の実践につながっていくと思うので、取り入れられる部分は、自館化していきたいと思う。

希望のヒント

もんもんとしている現状に対する示唆と希望（のヒント）をたくさんいただいた。

1つでも多くの授業を

全国では素晴らしい実践をされている先生や美術館があることを知り、励まされた。自分の置かれてい

る環境を前向きにとらえ1つでも多くの授業を行いたいと思った。

考え方に共感

学芸員の方の事例発表が、同業種として、示唆に富むことが大変多かった。方法論ではなく、普及に取り組む基本的姿勢、「何のための鑑賞教育か」というあたりの考え方（ベースにあるもの）に非常に共感した。また、「かるた」は、自分も実践したいと思う。

指導主事

違いがよくわかった

内容の濃い実践を、わかりやすく要約して発表していただき、勉強になった。小、中、学芸と、それぞれの立場から鑑賞のあり方を提案していただき、校種の違いや鑑賞のあり方の違いがよくわかった。

熱心な取り組み素晴らしい

3つの事例、それぞれ参考になった。3人の発表者の熱心な取り組みはどれも素晴らしいと思う。特に小学校の実践で、小学生から卒業後の中学生にまで連続させた活動が素晴らしいと思った。教師の人間性、学級経営、これらは授業の取り組みに大きな影響を与えるものですね。

方向性や方法を再確認

それぞれの立場で先進的な取り組みを紹介してもらった機会は、あまりなかったので、大変参考になった。現時点で日々行っている鑑賞教育の方向性や方法を再確認、概ね正しい方向に向いていると再認識することができた。